

日本災害看護学会 令和 6 年能登半島地震災害看護プロジェクト活動報告

報告年月日：2024 年 3 月 31 日（日）

活動隊員：花房八智代

1. 活動期間

2024 年 3 月 25 日（月）10 時 30 分 ~ 2024 年 3 月 28 日（木）17 時

2. 活動場所

避難所：珠洲市立大谷小中学校（石川県珠洲市大谷町 1 字 78 番地）

正院第一団地 仮設住宅：珠洲市立正院小中学校（石川県珠洲市正院町川尻 1 部 39 番地）

3. 石川県珠洲市の被害状況（3 月 26 日 14:00 時点 石川県庁情報）

人的被害 死者：103 人 うち災害関連死：6 人 負傷者：重傷 47 人、軽症 202 人

住家被害 建物全壊・半壊・一部損壊：8,471 棟 非住家被害：4,036 棟

4. 避難所の状況

【避難者数】

3 月 25 日 避難所登録数 41 人（不在 16 人） 食事対応 22 人

3 月 26 日 避難者登録数 43 人（不在 15 人） 食事対応 23 人

3 月 27 日 避難者登録数 43 人（不在 15 人） 食事対応 23 人 短期入所 9 名が加わる予定

【避難所運営】

3 月 31 日をもって外部常駐支援は終了する。日本災害看護学会は、3 月 27 日 8 時をもって常駐救護支援は終了し、以後見守り巡回に移行した。今後、大谷地区に 2 次避難者が戻り、住まいのない方は、避難所で受け入れるという本部の方針が出ている。

【避難所の生活状況】

日中は、ほとんどの人が外出しており、体育館に残っているのは学童 5 人と高齢者 1~2 人である。学童 5 人はまとめて勉強や読書、ボール遊び等を行い、高齢者は、積極的に散歩を行っていた。体育館に残っている方は自主的に身体を動かして廃用症候群の予防に努めていた。

食事は、避難所内避難所内の避難者及び在宅避難者の方々全員に弁当配布や炊き出しが継続して行われていた。

入浴に関しては、若山までの道が開通したことにより、若山方面の入浴施設に行く人が増え、自衛隊風呂に行く人が少なくなり、それに伴い、社協の送迎サービスを利用する人もいなくなっていた。洗濯については、節水を促しながら、洗濯機の利用を勧めていた。

5. 仮設住宅の状況

仮設団地入居者 76 件中、3 月 25 日までの訪問時の不在者は、24 件であった。支援中の 4 日間で 11 件の訪問での聞き取りを行っており、訪問が出来ていない家は 13 件となった。

訪問時の不在理由としては、自宅の後片付けもあげられるが、荷物のみ室内に置かれ生活され

ていない様子が開いているカーテン越しより伺えた。

6. 地域支援の状況

正院小学校避難所にて、主な正院地区代表者 3 名と外部支援者代表との地域コミュニティの話し合いに参加した。その話し合いの中で話題になっていたのが、被災された住民の方々は避難所に住んでいる方、仮設住宅に住んでいる方そして在宅に住んでいる方と多様になっている。そのことにより震災前の住民同士の関係性を維持することが困難な状況になっており、それが現在の課題としてあげられていた。また、多様な住まいの状況であっても、地域住民のコミュニティをつなげていくための対応について話合われていた。

7. 支援活動の実際

【避難所支援】

- ・ 要観察者は 2 名であった。前任者の申し送りがあった方の血圧・体重測定と下肢浮腫観察を行った。4 日前と体重の変化はなく弾性ストッキング着用も続けていた。内服も自己管理され、定期受診も行われていた。また、別の方が「便通はあるが、胃もたれの症状があり、食べすぎた」との自己申告があった。一度に食べすぎないように伝え、本人の希望により常備薬の胃薬を内服してもらい、その後症状は軽減したと報告があった。
- ・ 常駐活動終了に伴い、体調不良時は、自己判断をせずに、本部に伝えることや、早めに医療機関を受診するように避難者に伝えた。また、今後の医療、福祉相談のお知らせのポスターを救護スペースに貼付した。

【仮設住宅支援】

・ P W J (ピースウインズ・ジャパン) の看護師、心理士 3 名と同行訪問の調整を行い、2 名 1 チームで正院第一仮設団地を巡回した。支援期間中 11 件訪問した中で、見守り継続支援は 9 件であった。以下に見守りが必要な 9 件の状況について記載する。

3 月 25 日 4 件の個別訪問を実施した。その中の 3 件は、今後も見守りを継続する必要があるとした。見守り継続者は、失職・近所との交流がない、不眠、半身不全麻痺でリハビリ中の方、自宅再建への悩みなどを抱えていた。

3 月 26 日 2 件の個別訪問を実施した。見守りが必要な方は 2 件であった。

自宅再建や生活面における不安のため不眠気味の方、喫煙、飲酒、内服による体調悪化など、生活、経済、健康面へのサポートが必要なケースであった。

3 月 27 日 3 件の個別訪問を実施した。見守りが必要な方は 3 件であった。がんの既往、地震による外傷で回復困難の方など、身体面・精神面で支援が必要なケースであった。

3 月 28 日 2 件の個別訪問を実施した。1 件の入居者は高齢者で、家屋倒壊の下敷きが原因で金沢の病院に入院中であることを、たまたま荷物を搬送していた孫より伺った。退院後は正院に戻りたいという希望があり退院後のリハビリや介護サービスが必要とされていた。1 件は、解体申請を前に、家までの道路が塞がれ車が入れずに片付けが出来ないので、道路の開通を待っているケースであった。

以上、見守り支援が必要な方は、身体面、精神面、生活、経済、住まいの再建等、多方面のサポートが必要な様々なことが絡み合っていた。また、不在者宅の訪問時間の検討が課題となった。

8. 支援活動を通しての所感と課題

【避難所支援】

現在の避難所は、全員が ADL 自立しており、自ら運転して移動ができる為、生活面においてはほぼ自立傾向にあり、外部支援者の需要が減ってきていると思われる。しかし、4月中旬以降に2次避難者が避難所に戻ってくる予定であり、避難所内の配置等の考慮や、2次避難所から戻られたことによる環境の変化に伴う体調不良も懸念される。また、人間関係の変化のストレスにも留意していく必要がある。

【仮設住宅支援】

訪問しても不在が続いている家は、今後も引き続き訪問を続けていき、連絡先が把握できれば、連絡をしてからの訪問に変更する必要がある。訪問によりお話をお聞きした方は、それぞれに複雑な思いがあり、解決には至らないが久しぶりに話したという方もおられ、訪問することに意味があることを実感した。しかし看護師等の訪問は不定期であり、おのずと他者とのかかわりもなく引きこもりになる可能性も考えられる。自ら外に出て、自分達の思いを表出できる場所やコミュニティでの役割作りの環境調整を行うことが急務の課題と考える。

今後、支援者として、地域のコミュニティが機能していくために、継続した個別訪問の実施だけではなく、仮設内集会所での定期的なイベント等による住民同士の交流の機会を増やし、互いの関係性を構築していけるように支援活動を展開していく必要があると考える。

現地の様子



午前9時の大谷小中学校避難所体育館内の様子



仮設住宅の大雨の日の様子